



専門看護師養成課程の発展

大学院看護学研究科長 金川 克子

日本看護系大学協議会の専門看護師教育課程の認定制度が発足したのは1998年度からであり、審査要項にしたがって、認定に必要な審査が行われるようになっている。

なお、教育課程は大学院博士前期課程とされており、特定されている専門分野は現在11の教育課程であるが、必要性に応じて増えることは予測される。

当大学院博士前期課程にも専門看護師課程を設置することは重要であると考え、設置を検討し、現在4つ(地域看護、老人看護に引き続き、今年度のがん看護、小児看護が追加)の分野が認可され、北陸での設置の認可は初めてとなっている。

なお、それぞれの課程を修了の後には、専門領域での経験をつみ、日本看護

協会での審査を受け、専門看護師としての資格の認定を受けるのであるが、今年度はじめて老年看護の専門看護師が誕生できたことは喜ばしいことである。

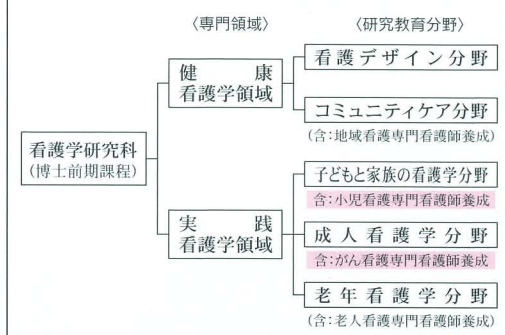
大学院修士課程の役割には高度な看護実践の専門家養成は必要であり、当大学でも今後必要に応じて専門看護師養成の教育課程を設置していくことは意義あることと考えるが、そのためには内外の支援が必要である。

なお、今年度に追加されたがん看護の専門看護師教育課程は、文部科学省の平成19年度の特例研究事業「がんプロフェッショナル養成プラン」のがん看護の専門看護師養成に連動する機能も有することになった。

すなわち、この内容の詳細は本稿では省略するが、北陸3県にある金沢大学、富山大学、福井大学、金沢医科大学と、当石川県立看護大学が「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」として共同事業として行うものであり、がん看護の専門看護師養成に関しては現時点では当大学が中心となっている。

患者や人々の健康の向上に福音をもたらし、看護の発展につながる専門看護師が養成され、北陸にねづくには、息の長い活動が必要であるが、将来をみつめてその時を期待したい。

大学院博士前期課程の構成



目次

専門看護師養成課程の発展	1	退任挨拶	5
大学の主な動き		新任教職員紹介	5
平成19年度卒業式・学位授与式	2	キャンパスライフ	
卒業生の言葉	2	第8回看大祭を終えて	6
修了生の言葉	2	相談するということ	6
北陸がんプロフェッショナル養成プログラム	2	この1年を振り返って	6
卒業研究発表会	3	追悼	8
修士論文発表会	3	図書館から	8
タジキスタン共和国国別研修	3	卒業生の内定状況	8
ワシントン大学看護学部での活動	4	キャンパススケジュール2008年度	8
国際交流の風2007(後編)	4		

●発行



石川県立看護大学

ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

大学 看護学部看護学科
大学院 看護学研究科

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL <http://www.ishikawa-nu.ac.jp/>
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp

大学の主な動き

平成19年度卒業式・学位授与式

暖かな春の陽射しに恵まれ、晴れ渡った佳き日に石川県立看護大学平成19年度卒業式・学位授与式が挙行されました。杉本副知事はじめ各界の来賓のご参列を賜り、また、ご家族の温かな見守りの中で学部卒業生87名、大学院博士前期課程修了生8名が多くの祝福を受けて巣立つ日となりました。学長の式辞では夏目漱石著『三四郎』から引用された「熊本より東京は広い、東京より日本は広い」、しかし、「日本より頭の中はもっと広いでしょう。」という言葉が印象的でした。今までの狭い範囲の知識ではなく、自分の知らない考え方や価値観を学び育んでいく力は自らの内にあることを知って欲しい、つまり無限の可能性は卒業生・修了生自身の頭（認識）の中にあることを教えてくれる言葉だと思いました。島崎信彰さんからは卒業生・修了生への感謝の思いを込めた送辞、卒業生総代井口智絵さんの答辞には看護職への第一歩を踏み出す熱い思いが、博士前期課程修了生総代森垣こずえさんの答辞にはより高度な看護実践力・研究能力を備えた看護職者としての情熱が語られていました。卒業生・修了生の方達がこれからも広い視野で考え、互いに切磋琢磨し、様々な分野での看護の改革を成し遂げていくことを願ってやみません。



卒業生の言葉

4年 森田 有香



この大学生活4年間は、私にとってとても充実した日々でした。そして、とても早かったように思えます。特に3年次・4年次は、アメリカ看護研修や実習、研究や受験勉強等、自分と向き合うことも多い2年間だった

と思います。

アメリカ看護研修や実習を通し、命・生活・家族の大切さと個々のニーズに応じた看護を提供することの難しさを深く学ぶことができました。また、自分が志す看護についても深く考えることができ、自分自身を成長させてくれた貴重な経験となりました。

4年次は、助産師になるため進学への受験勉強と研究で追われ、精神的にもつらい日々が多くありました。しかし、先生方や同じ夢を目指す仲間、4年間共に過ごした友、周りの人々の支えがあり乗り越えることができました。この1年間は、仲間の大切さを痛感し、この大学で出会いこのクラスで本当によかったと実感しました。本当に感謝しています。

そして、これから出会う妊産婦や赤ちゃんのために、この4年間で培った経験や学びを活かし、さらなる学びを深め努力していきたいと思えます。

修了生の言葉

大学院2年 紺谷 一十三



海が冬から春の色へと変化しつつあるこの時に、大学院博士前期課程を修了できとてもうれしく思います。

長年勤めた職場を離れ、大学院生として送った日々を振り返ると、新しい同級生や講義、レポートやプレゼンの準備など、看護師として仕事をしてきたこれまでと全く違った毎日で戸惑いも多くありました。

また、大学院での講義は、学内の先生に限らず、老人専門看護師やその道のスペシャリストの先生からも受けられ、とても大きな刺激を受けることができました。

そして、院生にとっての集大成でもある修士論文を書き上げる道程は、不安や心配が大きく、厳しいものでした。ですが、先生からの厳しくも温かい指導や同級生からの励まし、また、研究に協力していただいた皆様があってこそできたのだと、今しみじみと感ずることができました。途中、大きな悲しみに包まれたこともありましたが、佐藤先生からの数え切れない教えと先生がよく口にされていた「看護の探究」を及ばずながら継続していくことがこれからの看護師としての自分の支えでもあり自信につながると考え、春の良き日に新たな一歩を踏み出したいと思えます。ありがとうございました。

北陸がんプロフェッショナル養成プログラム始まる

成人看護学領域 牧野 智恵

平成19年7月31日、文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」(以下「がんプロ」とする)に、金沢大、富山大、福井大、金沢医科大、石川県立看護大を加えた3県5大学で共同申請したプログラムが採択されました。本プログラムは、平成19年6月に策定された「がん対策推進基本計画」に基づき、良質かつ適切ながん医療の提供やがん医療に携わる医師その他の医療関係者を養成するために企画されたものです。

北陸がんプロの特徴は、ICT(情報通信技術)による融合型教育システムおよび「がんプロネット」を構築することです。特に北陸3県で唯一がん看護専門看護師教育課程が認可された当大学は、良質ながん看護の実践家を育成する上で重要な役割を与えられたと考えています。平成19年度は、大学院教育にICTを取り入れた遠隔教育の実施に向けて、テレビ会議システムの導入、コンテンツの作成に取りかかっています。今後は、年に数回の公開講演の開催を計画し、北陸3県の医療従事者に最新のがん医療の情報の提供と、がん看護実践の本質を広く伝え、共に学んでいきたいと思っております。

まだまださまざまな課題が残されておりますが、皆様のご協力を得ながらすすめてまいりたいと思っております。よろしくご協力のほどお願いいたします。

卒業研究発表会

平成19年12月25日に、卒業研究発表会がありました。本学開設後今期で5回目になります。4年次学生87名にとっては、卒業前の最後の授業科目「卒業研究」の試験に位置づくものです。

「発表会」と言うよりも、本学では卒業研究の「研究発表」ということで、学生一人ひとりが取り組んだ研究成果を10分で伝え、5分で会場からの質疑に応じるというものです。従ってこの場合は、このような「研究発表」が出来るかどうかが問われることになります。他の学生の発表をきちんと聞いて、的確な質問・意見を伝えることも望まれます。

4年次学生は今年度4月から、教員1人に対し学生2～5名ずつに別れ、一人ひとりが研究テーマをもち取り組んできました。11月30日までに論文として提出し、その後口演用に組み直して発表に臨みます。

会場は、大講義室、中講義室1～4の5ヶ所でした。どの会場も、緊張の中十分に洗練された発表と、活発な質疑応答がなされておりました。研究フィールドとして、ご協力いただいた関係機関の方々も数多く聞きに来て下さり、温かいねぎらいの言葉と、さらに考察が深められる意見もいただいております。紙面をお借りして、厚くお礼申し上げます。

卒業研究専門部会の責任者として、質疑応答の時間が5分では足りない!と苦情がでるのではないかと、嬉しい懸念を抱かざるを得ませんでした。このあたり鋭敏かつ有意義に進めてくださいました座長の先生方にも、感謝申し上げます。

発表会の後は国家試験・卒業式を経て、看護実践の場さらなる修学の場に進みます。いずれの場においても、看護の事象を研究的な視点で捉え、看護専門職としての能力を研鑽し続けることになります。この卒業研究での一連の取組が、その一助になることを願ってやみません。

修士論文発表会

本年2月18日に平成19年度修士論文発表会が開催され、本学大学院生がこれまでの研究成果を発表しました。本学大学院博士前期課程としては開設後3回目の修士論文発表会になります。本年度は8題の研究発表がありました。発表会では多くの参加者から活発に質問・意見が出され、充実したディスカッションとなりました。修士論文は研究のゴールではなく一つの通過点であると考えべきです。

修士生の皆さんは大学院で得た知識・経験を生かし、それぞれのフィールドで一層活躍して頂きたいと思っております。

タジキスタン共和国国別研修「母と子のすこやか支援プロジェクト」をおえて

タジキスタンから「母と子のすこやか支援プロジェクト」によって、昨年の10月に6人の研修員を向かえ、12月に無事修了することができました。この間当大学の教職員の協力と共に、学外の多くの施設や専門家の支援によるところがありました。

もともと、このプログラムはJICAからの依頼から端を発したのですが、石川県の了解を得て、当大学が平成16年度から19年度の3年間の契約で研修の実施機関として行ったものと記憶しています。

この事業は国際貢献にもつながるものですが、私たちにとってははじめての経験であり、初年度は若干の戸惑いもありましたが、試行錯誤を重ねながら本年度はかなりの余裕さえ感じた面もありました。

タジキスタンは高地が多く、生活環境はもちろんのこと、乳児死亡をはじめ母子の健康状況は悪く、母子保健の改善を目的にした活動が重要な課題になっています。このような状況に対して、当初は私たちの現地での活動も考えたこともありましたが、研修員を通じてこの目的がかなえられることが重要と感じました。すなわち、研修員（タジキスタンの当事者）が中心になって、現地の状況を鑑みて、課題を解決することが重要であり、私たちはその手助けをすることと思いました。

すなわち、母と子の健康のため、地区中央病院がプライマリー・ヘルス・ケアの原則に基づいて、地域住民の保健・衛生・予防の知識向上及び意識改善が可能となる保健活動を立案し、実行できるように、私たちが研修プログラムを企画し、実施したわけがあります。

研修プログラムの企画や運用に際しては、タジキスタンではロシア語が公用語であるので、講義や日常の交流におけるコミュニケーションが充分とりにくいことがありました。

しかし、研修員は研修に対しては良好であるとの評価を頂いていますが、研修員の本国での実践成果は今後に期待したいと思っております。

この研修はひとまず3年間で修了ですが、20年度から新しい研修計画も予定されていると伺っていますが、これまでの実績を生かした支援活動となるよう希望いたします。

研修担当を代表して 金川 克子



ワシントン大学看護学部での活動

基礎看護学講座 藤本 悦子

8月から4ヶ月、ワシントン大学看護学部へ客員研究員として行ってきました。看護学部には「Biobehavioral Nursing and Health System (BNHS)」「Family and Child Nursing」「Psychosocial & Community Health」の3つの部門がありますが、私の研究先はBNHSで、Joie Whitney教授が率いるWarming studyのチームです。

今回の渡米の目的は、3つありました。すなわち1. Warming studyに参画し、自分の研究(温罨法の効果と睡眠に関する研究)を発展させること、2. 温罨法に関する研究に応用するために、Flow Cytometryの手技を習得すること、3. ワシントン大学におけるフィジカルアセスメントの教育法を学ぶことです。ここでは、3について述べたいと思います。

フィジカルアセスメントの科目は、Nursing Skillの科目(内容は大学の基礎看護学にあたります)と連動しています。そこで、Prof. Galluci が担当するフィジカルアセスメントと、LecturerのLandisが担当するNursing Skillの両方のクラスに、全コース参加させてもらいました。これらのクラスは看護学部へ進学してきた1年目の学生が履修します。ちょうど私がいた9月に新入生がやってきましたので、運よく担当教員とインストラクター(ナースプラクティショナーである、大病院や近隣病院の現役の看護師が大学へやってきて演習を指導します)の間で行われるmeetingに、最初から参加することができました。フィジカルアセスメントの講義は1週間に3時間、次いでその演習が3時間、そのあとにNursing Skillの演習が2時間あります。Nursing Skillのクラスには、講義やインストラクターによるデモンストレーションはなく、学生たちはWebに提示された学習プログラムで勉強し、さらにWeb上のビデオで手技を学習して、演習に臨みます。このように予習が主体で、学生達はとてもよく勉強します。周りの学生に聞くと、毎回最低6時間は勉強してくるということでした。Nursing Skillの演習では、学生はケアの前に、必ず習った範囲のフィジカルアセスメントを実施します。この範囲はコースが進むにつれて広がり、Nursing Skillの全項目が終わる15回の演習の最後には、同時にフィジカルアセスメントも、「Head to toe」の全てが終わるということになります。Nursing Skillとフィジカルアセスメントが乖離しない、よい教育法であると思いました。

注目されたことは、実習が日本のかたまってあるのではなく、週に1日の割合で進行することです。学生は習ったことをすぐ実施するわけです。患者選定は学生自身で実習前日に病院へ出向いて行います。感染ケアを習ったなら、学生はそのようなケアを行える患者を選定します。ちょっと驚きましたが、果敢にもMRSAの患者さんを選定している学生もいました。学生は、患者選定の時(半日)に情報を患者さんや記録物から収集します。ホームワークとして看護過程を展開し、ケアプランを立てて実習に臨みます。インストラクターが実習当日の朝にチェックし、実践を指導します。この方法には、患者を長く担当しないのでケアを評価しにくいという欠点があるように思えました。インストラクターも入院期間がとても短いので、一人の患者に深くかかわれないことを嘆いていました。医療制度の違うアメリカ事情を垣間見た思いです。しかし、とにかくにも、学生は1コースの間に12・3人の患者さんと出会うことができ、習ったケアを全て実施するので、確実に実践能力が身につくということはいえそうです(注射による薬物投与も患者さんに実施します。これにも驚きました)。

当初の目的以外にも、エイズ患者支援グループの活動への参加、obesityの患者宅の訪問、ICUでのアニマルセラピーなどを行いました。機会がありましたら、またご報告させて頂きたいと思っております。

今回、資金のサポートは、学術交流事業から3週間分あり、残りは科学研究費から捻出しました。研究上は時間的に厳しい面もありましたが、4ヶ月滞在できたことは、私にとっては大変貴重で、有意義であったと感じています。快く送り出してくださいました皆様に深く感謝しています。今後これらの経験を活かし、微力ながら石川県立看護大学の発展に寄与したいと思います。



国際交流の風 2007 (後編)

平成19年度下半期における国際交流活動は「夏期アメリカ看護研修」で幕を開けました。8/29～9/11までの2週間、本学の1年生4名、2年生3名、3年生6名が、ワシントン州シアトル市内の各家庭にホームステイし、全米の州立大学の中でも屈指の名門校とされるワシントン大学で看護を学んだことは、かけがえのない体験であったと思います。学生たちは、癌患者とその家族・友人を救済するための施設(Cancer Life Line)、低所得者や移民の健康を守る(Country Doctor Community Health Center)、日系人のための高齢者施設(KEIRO Nursing Home)、ワシントン州最大の救急病院(Harborview Medical Center)における、救急外来・集中治療室・産科病棟・精神科病棟などを訪問し、アメリカの医療事情に触れることができました。しかしながら、アメリカという異文化においても、患者の抱える辛さや孤独感、患者を救いたいという看護師の思いは、日本となんら変わりはありませんでした。今年度は、臨床経験のない学部学生のみでの研修でしたが、彼女たちにとって、医療事情は様々であっても、看護師の思いは同じであるということを実感できたことが、大きな学びであったと思います。学生達の研修を支援して下さった多くの方々へ深く感謝いたします。



退任挨拶

大学を辞して



大学院看護学研究科長 金川 克子

平成20年3月末をもって、8年間お世話になった石川県立看護大学を退職することになりました。当大学は平成12年4月に多くの方々から期待と激励を受けて充足いたし、初代学長（6年）続いて大学院研究科長（2年）として奉職できましたことはひとえに多くの方々のご支援の賜物と感謝いたします。思えば、当大学はこの8年間ひた走りの期間であり、大学のハード面では学部を中心に、図書館、地域ケア総合センターができ、さらに学部の完成と共に大学院の設立であり、ソフトの面では、学生の受け入れの最大の仕事である入学試験体制づくり、大学の理念・教育課程等を含めたシラバスや学生の生活便覧づくり、大学運営に関する諸規程や運用のあり方のルールづくり、教員の確保や研究体制等枚挙にいとまがない事柄に終始していたと思います。

創設期は教職員のご苦勞も多いが、目的に向かっての相互の支援や交流も頻繁にみられ、組織づくりにむけてのがむしゃらな試行錯誤の動きが要求される時期でもありました。

平成20年度には、博士課程の入学生をもって、形式的には大学としては完全な完成を迎え、名実共に中身の充実が期待されることとなります。

このような期間を多くの教職員と活動を共にできましたことは望外の喜びであり、若干うしろ髪を惹かれる思いではありますが、辞することになりました。

当大学は大学の理念にもありますように、よき人材の養成とともに、看護学の拠点として県民の健康と福祉に貢献し、石川県の看護の向上に寄与することが重要であります。

大学の使命は教育・研究・社会貢献といわれますが、限られた人材と設備、予算等のなかで、最大限の努力が大切です。看護系の大学の数もさらに増えることが予測されておりますが、石川県立看護大学らしい強みや特徴を掲げて邁進されることを期待しています。当大学のますますの繁栄と教職員のご健康とご多幸をお祈りします。

そして当大学の卒業生への長きにわたるご支援を期待いたします。

新任教職員紹介



佐々木 順子 教授
(地域看護学)

昨年10月、中途半端な時期に着任しました。地域看護学を専門領域としていますが、看護教育に関わるようになったのは平成7年茨城県立医療大学設立の時からです。そこで5年間、前任地の島根大学医学部看護学科で7年半ですので約13年になります。大学院では成人保健学という公衆衛生学・保健学を専門としていたので健康管理に関わるつもりでいました。ところが、就職したのは筑波大学社会医学系で、病院管理学・保健医療システム論を15年間担当しましたので、今も日本医療・病院管理学会の評議員をしています。一方で、保健医療制度や施設管理だけでなく、茨城県の市町村保健師と保健事業を継続的にやり、独自の健康管理システムも作りました。専門領域も何となく中途半端な気がしますが、いろいろやってきたためか看護を広い視点で捉えられるようになったのではないかと自分に良いように考えています。そして、人間の生老病死に深く関わり、それ故にその人の生き方に大きな影響を与える看護の力の大きさと素晴らしさを実感しています。看護学の発展に少しでも力になればと思っています。



堅田 智香子 講師
(小児看護学)

2007年10月から母性・小児看護学講座に着任いたしました。私は兵庫県で約10年間臨床経験を積んだ後、石川・富山で小児看護学、基礎看護学、成人看護学、

在宅看護論の教育に携わってきました。今回、念願の小児看護学を担当することになりました。

現在は、少子高齢化時代と言われていています。さらに、少子化現象に拍車がかかり、私達自身も子ども達と接する機会が減っているのが現状です。

しかしながら、子ども達は未来を担う宝であり、いかなるときも子ども達の健やかな成長・発達を支援することは小児看護の重要な責務であると思います。そのような現状の中で、学生の皆さんが小児看護に興味関心を持ち、小児看護の素晴らしさを実感し、子ども達が健やかに成長するための支援ができる事を切に願っています。

今後、本学において学生の皆さんと共に小児看護の楽しさや素晴らしさを共有できればと思っています。宜しくお願いします。

キャンパスライフ

第8回看大祭を終えて

実行委員長 松岡 真菜美

第8回の看大祭のメインテーマは「KANGOPIA」(石川県立看護大学+ユートピア)、これは、「絆」「Smile」「人とのつながり」の3つのコンセプトにもとづいています。本学に来て下さった多くの方々との出会いを大切に、人とのつながりを実感でき、生きる力をもらって帰って欲しいと願っていました。中でも本学大学祭の特徴である学生主催の講演会には、シドニーパラリンピックのゴールドメダリスト加藤作子さんをお招きしました。加藤さんは病気で脊髄損傷という病を経て、36歳の時に会った水泳から新しい生き方を得られた方です。講演を聴いて、涙が溢れそうになりました。どのような困難な境遇でも挑戦する勇氣、あきらめないで希望を持ち続ける大切さを教わりました。来場下さった方々も看護大学に来て温かい気持ちになって下さったのではないかと思います。

体育館ステージでは学生達がすっかり盛り上がりました。ここでは、自分たちが主役、思い切り自己表現して歌に踊りに酔いしれました。大学祭はもっと多くの学生がいろいろな自己表現できる機会になればと良いのではないかと思います。



相談するということ

学生相談部会長 武山 雅志

学生相談を担当する者としては「困った時には気軽に相談に来てください」どよく口にしてしまいます。しかしそう気軽に相談できるものでしょうか。「相談したら早く解決できるかもしれない」と期待する反面、「こんなことを相談したら笑われるのでは」「相談してもどうにもならないのでは」「本来なら自分で解決すべきでは」などと躊躇することも多いのが相談です。相談するかしないか迷いつつも思い切って相談に来られた方に、「相談してよかった」と感じていただけるようにきちんとした対応を心がけていきたいと思っています。

他人と話をすることで自分の考えが整理されたり、解決策がはっきりと見えてきたりしたという経験をなさった方も多いうように思います。そんな機会にしていいただければ幸いです。

学生相談部ではメールでも相談受付をしています。学籍番号、氏名、相談内容の簡単な説明、希望日時(第3希望まで)を書いて送ってください。保護者の方のご相談も受付しています。

相談受付メールアドレス gakusou@ishikawa-nu.ac.jp



この1年を振り返って

基礎看護方法論： 模擬患者を招いての演習

基礎看護学講座



基礎看護学講座では1年次生の基礎看護方法論最後のまとめに模擬患者(SP:simulated patient)を招いて複数の看護技術(バイタルサインの観察+日常生活援助技術)を統合した演習を計画・実施致しました。初めての経験で学生はおろか、教員も緊張しました。しかし、他講座の先生、大学院生の方々にもサポートいただき、無事終わられました。SPの方々は、学生の礼儀正しさと聡明さ、一生懸命な姿に感動したと述べて下さいました。外部の方の目は学生に温かく、嬉しい評価でした。SP導入しての演習を終えて、学生の看護技術習得への高い動機付け、患者さんに関わる時の緊張の緩和や臨機応変能力、相互評価能力等が培われるのではないかと思います。しかし、課題も沢山見えました。まだ、踏み出したばかりですが、多くの方から支援や助言を得て発展させていきたいと願っています。学生達が生き生きと輝いた目で看護を学び続けることができるよう今後とも努力していきたいと思っています。

この1年を振り返って



基礎看護学実習Ⅰ
1年 村田 篤彦

私は、特別養護老人ホームにより、入居者が日々過ごしている環境で実習させていただきました。私はこれまで寝たきりの方とは接する機会が少なかったため、どのようなコミュニケーションをすればよいのかについて、この実習だけでは未だ自分としてはよく理解できていないというのが正直な感想です。しかし、手を握ってあげたり擦ってあげたり、あるいはこちらから積極的に話しかけたりすることによって、相手にきっと何か自分の想いが届いているはずだと考えています。そして、その結果は、言葉ではなくても表情から分かるのではないかと考えています。また、私たちは普段当たり前のように言葉を使っていますが、この度の寝たきりの方とのコミュニケーションを通じて、言葉の力や重さを改めて思い知らされました。

さらに、私がこの実習で一番興味を持ったことは、個人入浴と機械浴の違いです。機械浴は人が多いためか個人入浴と比べて若干雑な気がしました。流れ作業になっているようで、お風呂が工場になっているような気がして、人間本来の生活がそこには存在しているのだろうか？と疑問に思う点がありました。個人入浴の方が、我が家のお風呂に入っているみたいに感じるのか、顔は明らかに気持ち良さそうな表情をしていました。あまりに気持ちいいのか、声まであげていました。しかし個人入浴は現実問題として、金銭的な問題がかかわってきます。機械浴でもそうですが、対象者（患者）に人間本来の生活をいかに提供できるかという問題に取り組んでいくことが、これから看護を担う我々の課題だと思いました。



基礎看護学実習Ⅱ
2年 森 あゆみ

初めて患者さんを受け持たせて頂いたこの実習は、実際の現場で自分が患者さんに何かできることがあるのだろうか、これまでに学んできた看護技術をきちんと患者さんに提供できるだろうかという不安な気持ちと、どんな患者さんに出会えるのだろうかという楽しみを抱きながら始まりました。

最初は、カルテの何を見たらいいのか、患者さんからどんな情報を得ることが必要なのか、看護師さんが何を意図して患者さんに援助しているのかきちんと理解できていませんでした。しかし、患者さんと接するにつれて、だんだん患者さんの問題が見えてきて、たくさんの情報がつながり、看護師さんのひとつひとつの行動の意味や学生である自分に何ができるのかが見えてきました。

患者さんの立場にたってみないと、相手のことをきちんと理解できないし、援助の必要性は見えてきません。この実習を通して、患者さんがどのような状態になってほしいかを考えて、根拠を持って、ケアや行動を行うことの大切さや難しさを学びました。「どうして?」「なぜ?」といつも考えながら根拠を考え、それに基づいて看護ができるようになりたいです。この実習で得た学びや課題、感じたことを忘れずに、今後の実習や学習に生かして頑張っていきたいと思います。



第Ⅴ段階実習
3年 高山 紗代

私は最初、実習はとても忙しく辛いものだというイメージがあり、自分に無事乗り切れるのだろうかと不安でした。しかし実際は、実習を通して様々な健康問題や発達段階にある患者と関わり、看護師の方々がたくさん指導していただき、毎日のように新しい学びがあるととても充実したものとなりました。

私は、実習を通して特に患者とのコミュニケーションの面で学ぶことが多かったように思います。相手の言葉だけでなく、表情や態度などにも注意を払うことは、普段の生活では気づかない自分のコミュニケーションを振り返り、見直すべき点に向き合い取り組んでいくことが出来たように思います。このように、実習は自分自身を振り返り、仲間や先生・指導者との意見交換、患者との関わりから看護に対する視野を広げる良い機会だと思います。また、実習中辛い時には、一緒に頑張っている仲間から元気をもらい、先生や指導者からのアドバイス、家族からの励まし、そして患者からの言葉など本当に多くの人に支えられながら乗り切れたと思います。

今回の実習の学びを今後生かし、自分の目指す目標に向かって残りの学生生活を過ごしていきたいと思います。



大学院
1年 松井 弘美

先日、2月18日、2年生の先輩方の修士論文発表会があった。先輩方は、教員からの質問に丁寧に答えておられ、その姿は看護の質の向上について真摯に考え、悩む姿に見えた。

思えばこの春、入学したばかりの私たちはこの先輩方の修士論文中間報告会に参加し、教員からの厳しい批判に驚き、不安を感じたことを覚えている。

教育の現場で自分の知識に限界を感じ大学院へ入学した私は、3歳の子どもの子育ての最中だった。子どもはわがままを表現する時期で、難しく感じていた。本当に育児と研究を両立できるのか不安に思った。

あれから1年、先輩方は研究者として毅然とした態度で演台に立たれ、私たちもまた、教員からの批判をただ厳しいと感じるばかりでなく、研究とはまとめ上げれば終了するものでなく、常に「よりよい」方向に向かって修正する流動的な活動であることを学んだ。

そして、私の子どもの情緒が確立する時期も修士論文執筆もいよいよこれからが本番である。

佐藤弘美教授（老年看護学）追悼



佐藤弘美先生は、本学開学以前から設立の準備に参画され、平成12年度の開学と同時に着任されました。平成18年度の大学院博士課程開設までの本学の基礎づくりに、行動力と責任感をもって多大なるご尽力をいただきました。また、教務委員長として、看護教育の流れを適切に掌握され、本学看護教育の充実やカリキュラム編成などに取られました。

専門の老年看護学分野では、老年看護に関する学会の役員としてご活躍され、近年は認知症や嚥下障害などの研究に取り組み、その成果は高齢者の健康福祉の向上など地域貢献に活かされました。昨年夏には、国際貢献事業であるパラグアイの日系介護研修員受け入れのため、関係機関との調整に努めていただきました。また、昨年11月には、先生の指導を受けた本学大学院修士課程生が石川県初の老年看護専門

看護師に認定されました。

先生はその常識ある適確な判断力と情熱ある実行力で教職員からの人望も厚く、夜遅くまで熱心に教育指導に携わり多くの学生に慕われていました。すべての分野にわたり本学の発展に尽くされ、今後もその中核となっていたでう方でした。その先生に早逝されて、途方に暮れる次第です。病を抱えながら教育・研究に邁進し、全力で駆け抜けた人生でした。先生の育てた学生達は、先生をひきつづ看護職者として成長していくことと信じています。

心からご冥福をお祈りして、弔辞といたします。

平成20年1月23日 木村学長弔辞より抜粋

図書館案内

当館の特殊コーナーについてご案内します。

ご利用については <http://www.ishikawa-nu.ac.jp/> をご覧下さい。



◇国試関係図書コーナー◇

- 看護師・保健師国家試験問題集を含め、その他の入試問題集約40タイトルを、2001年から最新版まで配架しております。ご利用の際に図書カードが必要です。
- 過去の問題集で、一部館外貸出できるものもあります。

◇研究・紀要コーナー◇

- 2階フロア奥に、地域別に配架されております。
- 国内の看護系大学、保健医療系大学の研究紀要等約320タイトルあります。禁帯出資料ですので、館内をご利用ください。
- 図書館ホームページに「紀要リスト」が掲載されておりますのでご覧ください。



卒業生の内定状況

3月現在の就職・進学内定状況は、これまでに引き続き第5期生についても100%となっております。

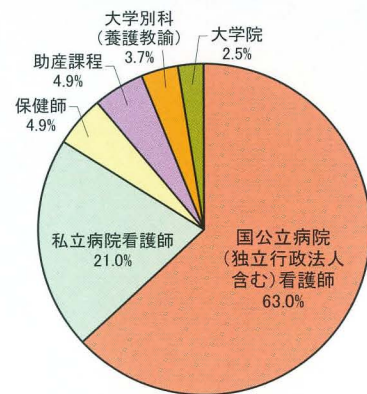
<県内就職>

石川県立中央病院
石川県立高松病院
金沢大学医学部附属病院
国立病院機構金沢医療センター
金沢社会保険病院
石川県済生会金沢病院
金沢赤十字病院
市町保健師など

<県外就職>

砺波市立総合病院
済生会高岡病院
福井赤十字病院
福井県済生会病院
国立成育医療センター
虎ノ門病院
信州大学附属病院
市町村保健師など

第5期生内定状況（平成20年3月現在）



キャンパススケジュール 2008年度

前	期	入学式	4月 7日(月)
		ガイダンス	4月 7日(月)～4月 9日(水)
		健康診断	4月 9日(水)
		授業開始	4月10日(木)
		履修登録受付	4月 8日(火)～4月21日(月)
		開学記念日	5月29日(木)
		オープンキャンパス	7月 中旬
		補講・試験	7月30日(水)～8月 8日(金)
		夏季休業	8月10日(日)～9月30日(火)

後	期	授業開始	10月 1日(水)
		履修登録受付	10月 1日(水)～10月15日(水)
		大学祭（看大祭）	10月25日(土)～10月26日(日)
		冬季休業	12月29日(月)～1月 6日(火)
		大学入試センター試験準備日	1月16日(金)
		補講・試験	2月13日(金)～3月 9日(月)
		春季休業	3月10日(火)～3月31日(火)
		卒業式・学位授与式	3月14日(土)予定